

## 椎の本花叔編『椎のもと』

——手銭記念館所蔵俳諧資料（七）——

伊藤 善隆  
(立正大学)

### 摘要

出雲国大社の手銭家に伝来する俳諧資料の中から、『椎のもと』（椎の本花叔編、無心斎一鈞序、日々庵浦安跋〔文政元年七月〕）を翻刻紹介する。本書は、『雲陽人物誌』を編纂したことでも知られる春日花叔の俳諧活動を示す撰集として重要なものである。

キーワード…俳諧、花叔、浦安、大社、手銭記念館

### はじめに

本書序文に拠れば、『椎のもと』は、編者の花叔が「古志の里なる金剛道場」に「椎の木塚」の碑を建てた記念の集である。「椎の木塚」の詳細は不明ながら、おそらくは芭蕉の発句「先頼む椎の木もあり夏木立」を刻んだ碑であったと想像される。ただし、田坂英俊氏『諸国翁墳記―翻刻と検討』（慶照寺、平成26年10月）、弘中孝氏『石に刻まれた芭蕉』（智書房、平成16年2月）には、残念ながら該当すると思われる碑の記載はない。また「金剛道場」については、『雲陽誌』の「神門郡 上古志」に「長命寺 真言宗金剛山明王院といふ」と記載

（島根大学附属図書館桑原文庫蔵本、同図書館デジタルアーカイブを参照）されるが、詳細は未詳である（佐々木杏里氏のご教示による）。

本書の跋文を記した浦安（宝暦一四年〜弘化二年、八二歳）は、手銭家とは親戚であった出雲大社の社家（千家家の代官役）広瀬家の人で、広瀬百羅の息である。また、手銭家五代目当主の衝冠斎有秀（明和八年〜文政三年、五〇歳）も本書に入集している。

さて、編者の花叔については、まずは『俳文学大辞典』（角川書店、平成7年10月）の記述を引用してみよう。

花叔ゆかし 俳諧師。安永三（一七七四）・三・二六〜文政七（二八二四）・四・一三、五一歳。本名、春日半蔵。別号、椎の本・橋庵老人。出雲国神門郡古志村の神職。土朗門。編著、句集『椎

の本発句集』(稿本)、随筆『袖かゞみ』(稿本)ほか。〔参〕桑原視

草『出雲俳句史』(昭12) 「櫻井武次郎」

人蔵)の図版を末尾に掲げておく。

ついで、その具体的な俳歴を確認するには、花叔自身が『雲陽人物

誌』に記した伝が参考になる。同書は、島根大学附属図書館桑原文庫

蔵本の画像が同図書館デジタルアーカイブで公開されている他、島根

県立図書館蔵本を翻刻した山崎真克氏『椎の本花叔編『雲陽人物誌』

翻刻』(私家版、平成25年9月)が備わる。

その伝によれば、花叔は幼時に簸川郡今市の忍ぶ庵魚坊の門下に遊

び、のちに江戸に出て雪中庵の俳諧を学んだ。やがて雲水となって諸

国を巡ったが、俳諧修行を本格化させたのは上州草津で希言に会って

後のこと。まず希言に従って信州善光寺に移り、ついで飯田の八巢蕉

雨を知って同地に至った。そして蕉雨の師である土朗に入門し、俳号

を己千から花叔に改めた。その後、飯田に古志庵を結び、また諸国を

遊歴していたが、父が亡くなったため、母や兄弟親友の求めに従い、

以後は出雲を本拠とした。出雲に戻ってからの花叔は、出雲大社の

「配札」の仕事に従事して、和泉・三河を担当し、その用務の傍ら、

諸国を巡って俳諧の修学をした。この「配札」の仕事を一「広瀬何が

し」に頼んで世話をしたのが、本書の序文を記した山本一鈞であった

という。やがて、花叔は神門郡古志に庵を結び、そこにあった椎の古

木と、芭蕉の「先頼む」の句に因んで、椎の本と号した。没後、花叔

三回忌追善集として『夢路農業桜』が刊行されたが、その編者の一人

は浦安、序文を記したのは一鈞である。

なお、別に調査し得た一本(個人蔵)には、原題簽が残っていたの

で、末尾に図版を掲げ(但し「集」は墨書)、翻刻を補った。また、

本書本文の版下は、花叔の自筆と考えられる。参考に肉筆の短冊(個

#### 〈書誌〉

書型……半紙本一冊。袋綴じ。楮紙。

表紙……原表紙。香色布目表紙。

縦二二・三cm×横一五・五cm。

題簽……なし。但し、表紙中央に題簽が剥落した痕跡が見られる。

序文……署名「無心斎一鈞」。

版式……無辺無界每半葉九行内外。

字高……一七・一cm(序文「まづたのみ庵を」を計測)。

跋文……年記「文政はじめのとし／戌寅のはつ秋」、署名「日々

庵浦安」。

刊記……なし。

丁数……全三十三丁(丁付「序」、「一」(三十一)、「跋」)。

#### 〈凡例〉

翻刻にあたっては、句読点、濁点は適宜補い、改行も適宜改めた。

概ね通行の字体を用いたが、一部に原本の字体を残した。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「をつけ、( )内に

その丁付および表・裏(オ・ウ)を示した。

参考のため、原本の一部を図版で末尾に示した。

#### 〈翻刻〉

椎のもと

「(表紙)

(白紙)

「(表紙)

まづたのみある椎の木陰をしたひて庵をむすび、椎の本とはなづけ侍る。はたそを名にして、ひとつの集をもつくらばやと、信心の同行に勧進の柄杓と俳諧の合袋をつきつくれば、いとさびにさびたる椎の実を、袋のくちのほころぶばかりにつかみいれたり。是ぞ彼の幻住庵の御魂ならめと、古志の里なる金剛道場におさめ、石を建て、椎の木塚とはなしぬ。かゝる因縁をものがたれよと、願主花叔が岑の（一）（序）  
 椎柴しひての望に、無心齋一釣、口をひらく。

「（ウ）（序）

先頼む椎の木もあり夏木立

月はみじかき夜の一ふし

誰やらが手元重たく白挽て

五つの馬のみな帰りくる

山鳩の豆喰時はしづか也

かはるくゝにうゑる杉苗

あしもとに日のくれかゝる八重霞

蝶に声なき奈須の篠原

やぶれ行衣に情をかき合せ

お伽をゆるす柴垣の内

雀麦はみだれて月のあらはなる

露はこゝろに余るものかは

魚に羽のあらばやと身の秋を経て

楠部いくらの里の小くらき

橋板をつないでまはる夕まぐれ

きげんはよしと燕がなく

大方は父のうゑたる花咲て

づらりと人の并ぶ若草

叔

「（ウ）（二）

春雨もしらぬ顔なる鴉かな

水ばなれしてもまた居る小鴨哉

小半道出ても遠し鹿の声

忘れても耳に声もつ子規

○

三河足助連

田に畑やなぐさみがてら童見に

山寺や花の支度の豆腐串

雪ちらくゝ日がら夜すがら降にけり

鶯や誰が踏あけし葎みち

伊勢だちの心もよひや門柳

咲花のうはさを庵の寐耳哉

雨はれに梅折音や傘のかげ

いな妻のこぼれ落けり瓦屋根

比枝の月湖くらく時雨けり

稲づまや湖の水比枝の杉

けしの花ふたゝびみれば乱れけり

桜木に筆とる人よはせを袖

ぼくゝと牛追ふ野辺の霞かな

雲はれて桜さだまる夜明哉

菜の花や三人眠る馬の上

○

ハ、キ米子連

山陰や春のいとまを蟬の泡

藪入も来るか門田の都鳥

ハ、キ米子連

亜艸

「（ウ）（二）

てふくの下に成けり不二の山

仙溪

春の夜や灯ひとつ江を渡る

亜来

草むらや雉子にはれたる朝の雨

椿子

年もはや行やよし野の片便

八千年

海士が灯の二つ見ゆるぞ雛祭

大眉

夢に見た山も見て来て日の永し

亜水

春の月心うつりの山辺より

十雨

左義長のすむ迄朝の心哉

大駄

吹おくる草のあらしや鹿の声

梅隣

くれの蝶行あたるまで行けしき

寿艸

手洗ひに海まで出たり春の宵

友琴

花に行までも花ふむ山路哉

樗山

汐先へ付いて出けり桐一葉

卓朗

鳥はみな明た声也江の柳

其人

松みれば古し月夜のしぐれ雲

几雪

庵の夜はけしの一重に明かゝる

僊子

外へ気のちらぬうち也けしの花

倭艸

空蟬やいつまで松のきはがしき

士航

○

月も匂ふこゝろぞ宵の菊の花

雲堂

我笠につくや柳の歩行神

草臺

鶯も鳴もかすむ朝空

大眉

春風に荷鞍の綱をときかねて

松蘿

火をうつ音の草にこぼるゝ

卓朗

炭の香に曇る計の宵の月

其人

曾呂利に秋を語らせて聞

几雪

ひよ鳥に須戸の松風かゝる也

寿艸

砂もり上し寺の門口

僊子

白紙の左り結びもなつかしき

朗

恋の夫に羽織たゝます

人

関の名は越えぬ先からよく覚

眉

ゆへある宿に若ばもる月

臺

つくゞと鎧を見ては涙ぐみ

蘿

風のけしきを絵にやうつさん

艸

二日はく草鞋おかしく脱捨て

雪

芹生の里は下萌になる

子

鍋蓋の白きも花の頃なれや

一枝

蛙やしなふ水汲に行

義人

○

山里は万歳遅し梅の花

元日

来るより煤を落す燕

雨村

腰みののはしに霞の雫して

艸臺

みだけし銭の淋しかりけり

日

匂ひなき名月頃の出商ひ

村

水のからびをわたる秋風

臺

女の童が露の篠弓引しほり

日

あやしの神と笑ふ口々

村

今の事雀もしりて啼やらん

臺

あやめ衣をぬらす池殿

日

綻びし緒絶の橋の跡もなく

日

「(四)

「(三)

「(三)

「(四)

「(五)

「(四)

「(五)

脚の揃はぬ膳并べたり

崑蕩の時雨を侘る月の夜に

何地へ逃しぞ為有が鶴

引しほに鼓の音のうち湿り

未さかりに成りし山の日

此辺も二本三本花になり

土器嗅き如月の風

○

行人のかすむや我もかすみ行

しら波は別に夜明て秋の風

行雲やけふの木葉も焚たらす

常につく鐘としりつゝ秋のくれ

したしきは梅に月さす夕哉

松風や陽炎登る赤合羽

虎杖や又走り出る朝の水

春の日の夢をのせたる机哉

芭蕉忌や床に懸たる杖と笠

夏の月小松の上に明にけり

おし鳥や別れた時が美しき

水に咲花何くぞ衣がえ

○

下陰に臥てうたれん椎の露

結ぶほどすむ山水の月

中秋の簾に雲を巻込て

しとねの塵を払ふ厂金

村

臺

日

村

臺

日

村

ハ、キ弓濱連

習風

、

、

栖鳳

大齡

、

冠艸

永章

朗臺

松居

三枝

鶴遊

行脚 千阿

習風

青把

冠艸

「(ウ六)

乗かけに花の小枝を折かざし

はるかの沖に硯いしとる

○

三日月の四五寸さすや草の庵

山ごとや牛追ふ鞭も霖の花

漣や声のせてくる子規

水音の荻にあたりて夜の声

添水して我田の秋と成にけり

笹簾にうつりて寒し梅の花

のどかさのうつるも早しいせの海

暁の花におさるゝ曇かな

春の海夜く露を置けしき

朝く雲置替て若は山

苔から毎日見舞ふ牡丹哉

鳴の外うごくものなし此夕

船岡の雨なつかしや女郎花

日ぐらしやまだ須廣迄は片明り

松にある月を力や秋のくれ

とりぐに人の噂や遅桜

此撰集にもれたるは、易からぬ恨みなり

おくれ来て見る甲斐もなき桜哉

火を焚て見たき物也荻の声

秋風に吹れて居るぞ牛の角

身一つに夜すがら関の蚊遣哉

世の中のむつまじければ蝶二つ

思敬

大齡

ハ、キ會見連

鳳瓜

九穗

金芽

一調

松斎

壺山

來駄

湖柳

海棠

花柳

愛露

籬柳

蘭月

柳志

紫柳

染遊

白蟻

見蟻

一爪

五風

聽雨

「(ウ七)

「(ウ七)

「(ウ八)

朝の尸思ひの外に高ふくる

沾萩

嚙ては反古を捨る心根

水

○

客僧に一間あてがへ馬の声

行脚木海

「(ウ八)

山水も浮世をさして流れ行  
としぐふへる寺の雞

海

火を焚消せば芦の穂の飛

湖水

おもふさま待たあげくの供帰り  
月はさやかにかはく手拭

海

秋ふかく杉の赤みを伐出して

、海

やうくと蜀添ウツキの虫を銭にして  
通草のつるを窓へ引込

水

鯛の下るけさの水色

、海

関の鐘一足出ても目にかゝり  
先雨らしき節かはりなり

水

月見にといふ迄もなきうしろかけ

、水

芥火のけぶるを海へ吹なぐり  
奇麗な事を申花の夜

海

酒屋の前におろす幕串

、水

長閑さに蚕も羽をつくりかけ  
いくすぢ春をわけし山道

海

いかにして餌につく鶴をつなぐらん

、水

吹ぬ日はなし芭蕉葉の風の音  
ほのくと水より匂ふ桜かな

海

呢とまれとた、かれにけり

海

松江連  
無等々  
沸声

水

ふつ、かさ年はもゆかぬ世帯ぶり

水

秋暁  
蟬蘿

水

師走の梅をちらす精進日

海

閑子鳥つとめてけふも鳴にけり  
畠から藪入つれて戻りけり

水

湖の得とおちつく霜和に

水

千部よむふもとの寺や花七日  
春の水一日鶴の濁しけり

水

玆らしく聞鐘の鞞鳴り

海

松風ウツキに耳もよせざる安居かな  
舟の灯の鴨にうつりて流れけり

一湖

草のはをかいしく月の料理物

水

古水  
一止

水

簾まくればたゞ広き秋

海

魚山  
董路

水

乙鳥の帰りかけても隙の入

水

「(ウ九)

札がよひのけふも洗濯

海

「(ウ九)

おしなべて花の寒さが癖になり

水

「(ウ九)

しめりかげんの菊のわけ土

海

「(ウ九)

春の夜の子を遊ばせに灯をともし

、水

「(ウ九)

城のふしんを触てくる也

水

「(ウ九)

糞舟は宮のあちらをはしり過

海

「(ウ九)

附木の屑がおもしろくちる

水

「(ウ九)

軒口の葱を風の便にて

海

「(ウ九)

夏草に野守が鏡くもりけり

貴見

「(ウ十二)

曙や千鳥の帰る山のはし

太柏

カモ  
春路

鳩の巢やあたりて消る水の泡

鬼眼

カシキタ  
池月

家二軒并て梅と柳かな

蓴水

ナフヘ  
なか女

おもしろき半をくる、桜哉

竹里

大社連

降はへて貧くも見えず雪の家

竹溪

有秀

いな妻に啼やみもせずきりぐす

吐玉

「(ウ十二)

そはく、と野を冷しけり秋の風

故泉

文雄

うち返す花はよし野の畠哉

岫雲

魯石

秋雨の只降にふる野山かな

以選

田柳

一しほのものや時雨の炭かしら

白化

雪衰

海山とかはる夜寒の枕かな

女  
梅光

「(ウ十三)

鶯と我と経よむ朝戸哉

、未紅

、雅朕

海老舟や夕兒あかり見て付る

シマタ  
完穂

如瓶

郭公たまる所が聞えけり

大亀

乙木

新しき名は呼にくし花の中

嵐水

「(ウ十二)

猶女

知る人のうつこ、ろ也遠礎

亀角

日々庵  
浦安

廿日の月を運ぶ汐先

草臺

有秀

蟬の覗く扉に秋かれて

大亀

露丸

かれ竹燃す音のおかしき

完穂

安

何にする薬かさらす山のはに

嵐水

秀

七つ起する老のめでたさ

湖雲

丸

○

夏の月旅の枕に落にけり

大ツカ  
鼠堂

秀

ちり際の梅さはがしう匂ひけり  
郭公鳴行かたや雨のあし  
其桜さらば呵らん九郎殿  
花に飛虫になれく、なめくじり  
○  
夕ぐれになれば目のつく芒哉  
春の日は何所で啼たか閑子鳥  
寄添へば桜に近き夜明哉  
蜀魂いつまで寒き椎の雨  
麦荊ていな妻待ん筑波山  
朽る木の價千両郭公  
春の日は是から出来て梅柳  
あし高に日の入山や啼河鹿  
速に雲はながれて天の川  
つむ人にうつろひ易し紅の花  
郭公人耳よくる世の中や  
○  
世に薫る椎の葉分の風高し  
立よる笠にほと、ぎす飛  
湖ひとつ隔てし城に虹消て  
進士の出たる邑しづか也  
月に磨き露にやつれし犬筑波  
堅さまくらよきりぐす附  
茸狩の遺恨の雲のはれか、り  
物陰暗し十郎が瘦

「(ウ十二)

露泉

カモ  
春路

ナフヘ  
なか女

大社連

有秀

文雄

魯石

田柳

雪衰

「(ウ十三)

、雅朕

如瓶

乙木

猶女

馬嘶

日々庵  
浦安

「(ウ十三)

有秀

露丸

安

秀

丸

秀

五調にありがたき名を給はりて

うつり香妬む袖の朝風

須戸の浦にもしほたれつ、侘びてみん

松のしぐれを月のまたがる

神祭る鹿やかれ野の夢寒き

訪らふありと国史さし置

三人の翁は酒にうとまれし

春やむかしの庵の梅干

木兔の面目なくも花に明て

畠に運ぶ土うらゝなる

○

山の名のあらしもふりて桜哉

傾城の我身をかふて花見哉

須戸明石磯に船なし月今宵

愛らしき足踏出すや蚊屋の外

板庇もりて涼しや夏の月

さらし場も夜は又涼し夏月

行あたるうき寐の鴨やみをつくし

管あけてみれば淀也郭公

○

大雪や世界の闇は海ばかり

赤門に人の立けり梅の月

涼しさや柳にかかるき雨後の月

新蕎麦のついでに参る寺も哉

若竹に千代を譲りて落ば哉

丸

安

秀

丸

安

秀

丸

安

秀

丸

大津連

僧無為

渡月

窓月

路宣

一斗

外遊

似竹

僧一字

今市連

鳩飛

寿松

亀齡

亀子

龜孫

朝嵐萩を起して通りけり

薺の咲て夜廻り仕舞鳧

正成のはなし聞夜や啼千鳥

満月の夜燈も闇し梅の花

乙鳥やすいとぬけたる奥座敷

二の門へ桜ちる日や山おろし

日ぐらしや気はいそげども木曾の坂

花と見た春は夢也冬木立

さばてんや木枯しらぬ鉢住居

鮎飛て花の筏をやぶりけり

和歌の浦片男の波や引千鳥

よく聞ば蚕の雨や夜しづか

梅が、や日の脚ゆるき窓の内

よその菊うらやむけふの節句哉

よしの山戻りは寒し花の雪

初雪や此ちり塚も捨られず

垣根までまだ夜は来ず雪の庭

雪吹にもうごかぬ驚の眼哉

鶯の声や二もなく三もなし

片よりて春の過たる柳哉

見上れば昼の月也啼雲雀

けふはまた二つ啼けり閑呼鳥

柴火たく管の目寒し啼千鳥

鹿啼て高ふ成けり夜の山

○

静雨

静風

野梅

野鼠

井蛙

亀勇

巢鼠

志水

野鼠

陌柳

牧笛

自省

よの女

しほ女

省月

都水

水月

和好

遊水

洞裡

守中

龜笑

文波

洞子

小田連

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)

「(ウ十四)



山ならで笑ふものなき涅槃哉  
 木がらしの目にも侘たる芒かな  
 天の戸をひらくや空に啼雲雀  
 しら浜のいろとりて来る千鳥哉  
 水くぐる蛙に糞のつぶてかな  
 万代や花に呼る、春の風  
 辻堂へ波のうち込桜かな  
 つ、がなき松の時雨や跡明り  
 茶の花や竹はしぐれてさはがしき  
 青柳をもち出る月の明り哉  
 花に来て花にむせたる山路哉  
 三日月に無孔笛吹や秋の風  
 いろ鳥もつれにして散木のは哉  
 化もの、数多出る夜の踊哉  
 心よふ竹にうけたり春の風

其泉

其蝶

其暁

「(ウ十七)

其水

其流

知新

柳雨

「(ウ十七)

僧如石

江雨

湖舟

布水

、

「(ウ十八)

独吟

灯の果は尾花にかゝりけり  
 いつまでも照明ほの、月  
 うす霧の沢辺の鶴や鳴やらん  
 庵の襖の墨が消行  
 我国のなまりを人のよく覚え  
 雪を寒しとふるふさ、竹  
 傾城のかれし柳に涙ぐみ  
 むら雲早し道風が歌  
 開帳を谷の空家へもち出し  
 数珠かけといふ鳥のふえぬる  
 黒砂のこがねになると見て居れば  
 恋の茶碗をみがくおかしさ  
 月涼し酒もすゞしと寐て仕舞  
 蛍のひかり手にも取られず  
 川中へ落こむ不二の陰法師  
 はなしの底を祿宜にた、かす  
 小辛洲の花に十日の白脚半  
 かげろふいさむ朝ばれの軒

布水

「(ウ十八)

「(ウ十九)

二部里石

常楽寺土口

神在二都良

けしの花散や小尼のひとつ鉦  
雉子の声山に余るや朝朗

百丈  
玉沾  
「(ウ十九)

くれて行秋にもそまず鶴の脛

百丈

汐うちかぶる月の下草

三都良

ひたすらに紅葉する木を宿にして

素雲

机の外は塵に成けり

士口

遠山を目鏡にあて、侘るらん

良

水音はやく温泉烟がたつ

丈

梟の声かすむとて居酒吞

口

鳥井を建て孫の気に入

雲

白砂を又つみ直しく

丈  
「(ウ二十)

ものかはといふ名さへ静けし

良

紫陽花を心にもてば月よさし

雲

くひなの雛の恋にかけ込

口

気味よくも大岡村のいのり声

良

北を隣の窓のむら雨

丈

雑役の波うち際をこしかねて

雲

すこしの事もかすむたそがれ

口

咲花の哀を誘ふ雲の行キ

良

もろ人結ぶ庵のいとゆふ

雲  
「(ウ二十一)

○

知井沖連

鶴下りて心の高き野梅哉

魚村

むつまじき星の雫か草の露

素竹

ほと、ぎす跡は常盤の落ばかな

猪角

人恋し椎を時雨の宿にして

雀鶯

春の月波のうつゝを出にけり

素雲

雷の跡ははりなし合歡花

、

月に臥芒や雨のあし溜

、

埋火や我淋しさを消のこる

知井本郷連僧 其風  
「(ウ二十二)

松高し辞儀して過る梅の花

里蝶

宵く月の草を行涼かな

飛鳩

落し水いづくの秋の夜より来し

波濤

藪分て咲出る梅の力かな

竜池

野のけしき年く梅の曇哉

燕子

春の日の猶余りあり松の陰

鶴寿

水に落て又登りけり草の露

素風

木がらしや月より高き峰の松

龜齡

かれ枝に雀のつくや初しぐれ

里中  
「(ウ二十二)

夢は花月はさかりに子規

里川

達广忌やどちら向ても枯尾花

庵月

卯の花や袖のしめりの片心

梅月

ふつ、かな人の声あり梅の花

龜口

しら梅の月になる迄匂けり

みつ女

ゆたかさや梅咲けふの人車

芦ワタ連僧 鸞巢

春雨にこそぐられけり男山

龜翁

さびしさは心の骨の桜かな

鳳谷

不如帰こよひも寐せぬ門の椎

青梧  
「(ウ二十二)

風薫るもとのあるじや椎の花

馬木連 東宇

夕月と共に見返す桜かな

基丁

夢覚す梢の秋や風の音

松隠

三千丈

若葉して此川上に風もなし

育中

よしの山花に月日は無りけり

渡舟

いざよひや咄しのもる、闇の門

寿水

きりくす笥の水の絶間哉

掃月

門番を起す人あり啼蛙

花朝

月花に夜は明にけり椎の本

越山

魂の緒をかけて戻りぬ花の枝

上古志連僧  
阜乙

有明のあらしも残る桜かな

貞谷

咲揃ふ水のへだてや杜若

村玉

凡六千吟之内拔章百詠

〔(二)十四〕

くれかねて秋高き日と成にけり

東廬

権乃本塚奉納尾陽大鶴庵評

〔(ウ)十三〕

青柳のかるふ呼出す小家哉

杜若

卷頭

〔(ウ)十三〕

しら菊の日和定めて盛哉

李郷

宿取て見て居る春の入日哉

ヨナコ  
亞艸

都にも夕部がありて啼蛙

澄水

飛蛩しづかな人に取られけり

弓濱  
大齡

行過て戻る戸口や梅の花

寿山

鶯のことしにしたる山家哉

米子  
草臺

瀧壺へ虹のさし込紅葉哉

千里

行春の雲やいつまで雲に鳥

ミカハ  
青々

名月や柳と花の相隣

一河

月出てかはるや海の鳴所

、

うつくしき夜を白菊の主哉

魯山

啼声はさびしい事をしらぬ哉

松江  
賀成

春風や吹る、姫のもどかしき

和風

発心のはじめに見たり雪の山

〔(ウ)十四〕

関寺と名を呼れたる涼哉

桂芳

関の灯のうつるばかりぞ雪の上

米子  
士航

しら瀧も花のにごりや春の風

歩月

ひとつく散花に添ふ心哉

、十雨

瀬田を出て宿なき秋の夕哉

素遊

動きさへすればくる、ぞ秋の雲

東京  
東山

気をかへて古木の桜咲にけり

二水

油火は馬にもみせて夜の雪

ミサキ  
湖水

月代や花におどろく人の声

下古志連僧  
不求

初秋の戸にうちかける夜汐哉

弓ハマ  
習風

朝くや柳を払ふ庵の主

寸松

猫などで、居るや田植の昼上り

ミカハ  
棟老

水仙や雪に薫れば雪の花

枝月

鶯のぬれて啼てものどか也

弓ハマ  
天哉

はつ雪や轍ふみ行人ごゝろ

露光

大としの夜にまで汐の満干哉

米子  
燕里

右左おくれはせぬぞ山桜

吾友

雀子のむかふ下りに立にけり

〔(オ)十五〕

此宿に清きながれや椎の月

九鶴

〔(ウ)十三〕

十雨

薜の花に手がろき料理哉

青々

一羽厂月の表へ出にけり

チノミヤ  
素竹

花木槿毎日くる、日なりけり

大ツカ  
鼠堂

山ざくら背てみるにしくはなし

天哉

梅ちるやほろりと落る灸の皮

山根  
哥遊

松明振て青柳みせる舟場哉

十雨

なめくじり世にあるかひに動く哉

チノミヤ  
素雲

此雪を知らぬか起ぬ放れ家

ミカハ  
巴洲

巢の鳥の羽を延すらん隴月

タムラ  
如石

午時分の日和もちけり帰り花

寺門  
松斎

何事のあはれにも似ず秋の月

シマタ  
嵐水

鹿笛や白くみゆるは芒のほ

亜草

花筏雛のせばやと思ひけり

米子  
樗山

花芒おせばあく戸にさはりけり

神在  
三都良

なの花や南河内の水明り

弓ハマ  
車三

つ、しみの深き色也春月

米子  
一枝

松風にあて、居る也蚤の跡

亜草

夕ぐれの秋を放れてけふの月

大社  
亀測

啼時の心やすさよ不如帰

弓ハマ  
常人

一拍子ぬけて日の入冬野哉

マツエ  
英暁

山里や箒の先の秋の雲

十雨

皆米になるか門田の月の露

鼠堂

田舎には月夜多しや梅の花

下分  
里水

何に出る小御門の灯や夜の雪

米子  
大眉

郭公今さら捨る空はなし

鼠堂

見へ出せばいくつもみゆる浮巢哉

湖水

山里や鳴子にかゝる初しぐれ

草臺

夜に入らば芒をこへん汐の色

弓ハマ  
蘿堂

正月の日和つくるや浦の鶴

(ママ)

昔から梅は折らるゝ木也けり

草臺

夕虹の消かねてちる芒かな

チノミヤ  
波濤

いなづまの早くも闇に戻り晝

哥遊

起く物くはず也花の宿

弓ハマ  
雨村

汐風の笹ふく音や夏月

ミカハ  
蘭所

さればとて山に寐もせず春の人

大ツカ  
馬遊

舟頭の起て物喰ふ霞かな

古志  
東廬

傘の下から見たり春の海

草臺

御仏の膝で啼けり雀の子

里水

京を出て鷹に小寒き藁家哉

古志  
露光

思ふ図に船の着けり梅の花

嵐水

元日はどの木に居たぞ子規

弓ハマ  
富門

春雨や間がな透きがな鳥が啼

(ママ)

山鳥の尾にあらはれて春の風

大ツカ  
琴志

明安き夜に追れ行鵜舟哉

クムラ  
布水

松風のはじめ終を花芒

マツエ  
三枝

如月や猫の草はむ門はたけ

一枝

洛中の朝めし過て霞かな

英暁

煎たつや時雨する夜の馬の豆

湖水

鶯に心の合ふてくるゝ日ぞ

大眉

庭を掃し朝から梅の咲にけり

素竹

「(三十六)

「(三十五)

「(三十六)

「(三十七)

「(三十七)

ものぐさにくれても秋は月よ哉

夜に飽て起ても夜也露の音

祢宜が子のひとり遊びや杜若

山水に明りがさして散芒

雪翁となるおもむきや薄月夜

降出しや藪へかけたる一しぐれ

水の手へ下りて拾ひぬ鹿の角

行秋となるばかり也闇の端

蘭の香のかくれかねたり八重葎

初霜や折敷の端の唐辛

時雨、や葎が宿のかけ菫

鶯の声ひく瀧の嵐哉

宿かさぬ木の本はなし花のくれ

鐘撞ば乱れ啼する千鳥哉

霞げしき旅人にたる日成けり

郭公ちとつ、雨の降夜かな

涼しさの筋がみゆるぞ夜の雨

霽のつるにかゝるや天の川

夏の夜を白浜に啼鳥哉

人恋し夕山桜ちり初る

波かけてさらりと成し芒哉

山里や青田をさます鐘の声

涼しさの中にある也橋柱

ほら貝の遠音さしけり花づくし

秋の蠅こゝろの先を歩行けり

素雲

晋和

蘭所

朝柳

亜岬

榎老

弓ハマ、松居

米子、友琴

、亜来

湖水

米子、亜水

十雨

亜来

土航

亜来

里水

弓ハマ、恵玉

湖水

布水

チノミヤ、竜他

東山

雨村

チノミヤ、鶴薺

亜水

英眺

「(三十八)

「(三十八)

「(三十九)

朝山のさゆるやうにて雉子の声

春月かすかに海の聞えけり

来た程は去らぬか厂の一羽づゝ、

水上は苔の雫よかんこ鳥

しとくくと鳴も寒いか朝の内

露しぐれ鐘に訝のある夜哉

いな妻のはげしくかゝる早瀬哉

川汲に行や柳のよき所

巻軸

人中へ出てぬるみけり山の水

追加

蝶鳥もたのむよ椎の下雫

小菊咲日南になるや椎が本

椎の木の蓋になる也初桜

涼しさや雀も知らぬ椎が本

椎拾ふ事も習はむ里童

たのまれし椎の木下も時雨けり

椎の木によりかゝりくむ清水哉

屋根ごしや椎を時雨の昼下り

此宿も昼寐処ぞ椎の花

年くくやおこたりもせぬ椎の花

床しさや椎ある宿の夕しぐれ

○

椎の実を椎のはにもれ翁の日

湖水

弓ハマ、冠子

蘭所

大社、雅肤

湖水

弓ハマ、一葉

草臺

草臺

一枝

大鶴庵

塊翁

塊翁

江戸道彦

、蕉雨

、蒼虬

京、米彦

大坂、卓池

ミカハ、秋峯

、榎老

イセ、椿堂

ハ、キ、湖水

、草臺

元日

「(三十九)

「(三十九)

「(三十九)

椎の本花叔編『椎のもと』—手銭記念館所蔵俳諧資料(七)—(伊藤善隆)

椎の木のあれば新井の堀所

馬嘶

椎の実の陰つくりたる月よ哉

一鈞

椎のもとの椎は、先たのむとの給ひし蕉翁の意をうつして号  
られしものならんか  
〔三十一〕

月雪にするたり椎の一構

素雲

で、むしの住家をつくりて椎のもと、呼はやさるゝに

ぬし顔やけふをはじめの椎の花

花叔

〔三十二〕

あるは花山に馬を飛し、あるは月下の波にふして鳩の浮巢のながれ  
とまらざるを椎の一木に身をよせて風騒狂客の頭陀を探り螢雪のい  
さほしを積て、此集のもくろみを遂し人は、我友古志の橋陰なり。

かくいふものは、あたり近きすがの〔跋〕里なる日々庵浦安。  
文政はじめのとし

戊寅のはつ秋

〔ウ〕跋

(白紙)

〔表表紙  
見返し〕

### 〈付記〉

本稿をなすにあたり、手銭家の皆様には特段のお世話に預かりまし  
た。また、手銭記念館の佐々木杏里様には、細部にわたり懇切なご教  
示を賜りました。記して感謝申し上げます。

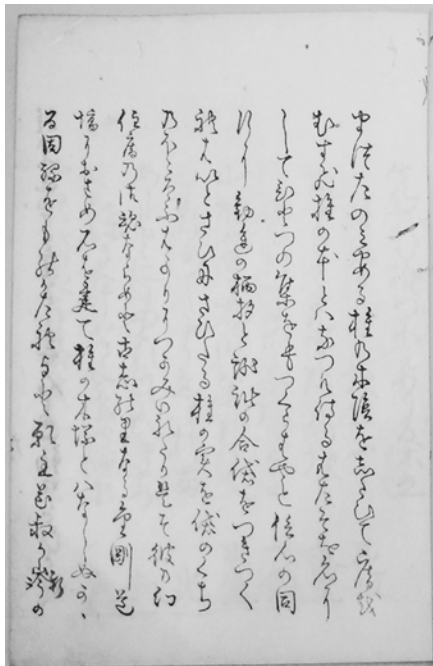
本稿は、山陰研究プロジェクト「山陰地域文学関係資料の研究」  
(二〇一六～二〇一八年度、代表・野本瑠美)、科学研究費補助金(基  
盤研究(C))「人を結びつける文化」としての俳諧研究(研究課題  
番号二六三三〇二五九、代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

### 〈参考図版〉

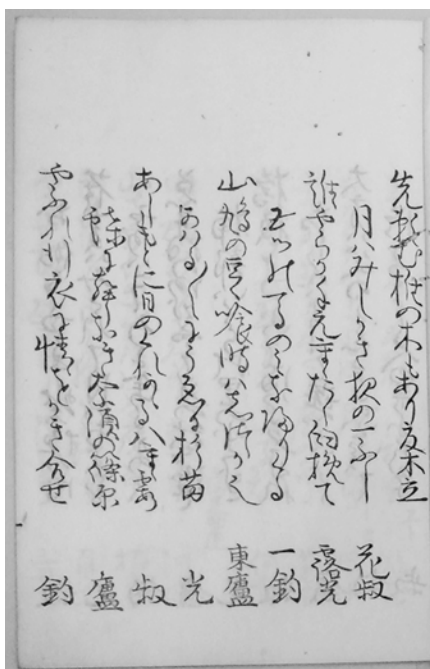
1. 表紙(個人蔵本による)



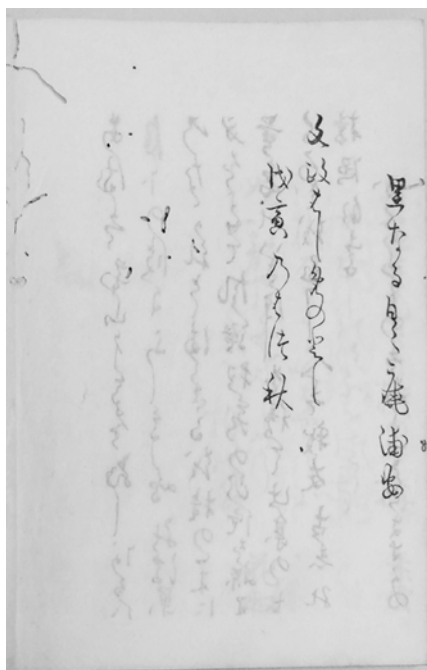
### 2. 序文冒頭



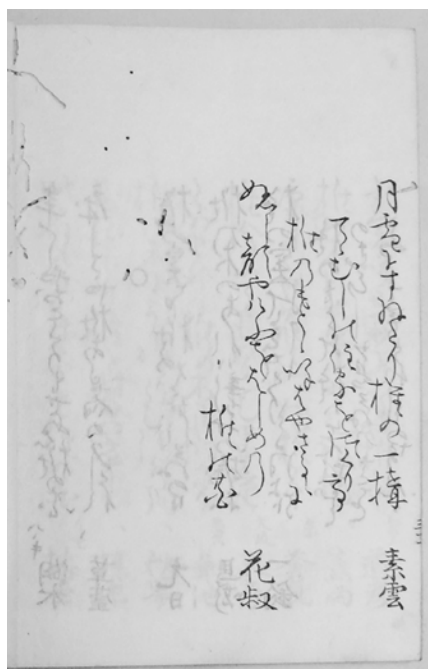
3. 本文巻頭



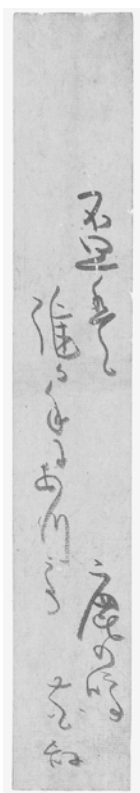
5. 跋文末尾



4. 本文巻末



6. 〈参考〉花叔短冊「盃は誰が手にあつて鹿の啼 花叔」



**Shiinomoto Kashuku ed., “Shiinomoto” : reprint and introduction  
— A study of Haikai literature in Tezen Family Archives (7) —**

ITO Yoshitaka  
(Rissho University Faculty of Letters)

[Abstract]

“Shiinomoto” owned by Tezen Museum is a memorial collection which Kashuku had built the Shiinokizuka monument. Kashuku was one of the most important haikai poets in Taisha area.

Keywords : Haikai, Kashuku, Urayasu, Taisha, Tezen Museum